
学園黙示録 HIGH SCHOOL OF THE DEAD ~ とある学校の場合 ~

神威玲夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園黙示録 HIGH SCHOOL OF THE DEAD
〜とある学校の場合〜

【Nコード】

N8087S

【作者名】

神威玲夜

【あらすじ】

漫画のような世界の中で、友と共に生き残っていく。
なにが起きているのか、それは、誰にもわからない。
わかっているのは、「奴ら」が存在しているという事だけ

第0話 ―人物紹介― (前書き)

小説を書くのは初めてなので
優しい目で見守ってください

第0話 | 人物紹介 |

主人公

カミサキリョウト
神裂涼斗

男 高校三年生

身長175センチ

体重70キロ

赤髪

どこにでも居そうな平凡な学生。

髪型は前髪は目が隠れる程度、後ろは結べるぐらいの長さ

授業中寝る事が多い

友達 1

シラハキョウ
白羽叶

女 高校三年生

身長160センチ

体重45キロ

緑髪

ちよつとヤンデレの入った女子高生
髪型はセミロングで前髪をピンで留めている

幽霊などが好き

友達2

アオタ ユウト
青田悠斗

男 高校二年生

身長165センチ
体重60キロ

青髪

いつまでも敬語が抜けない二年生
電子機器の扱いに優れる
髪型はショート

ゲーム好き

友達3

ミカミ ソウジ
御神双熾

男 高校二年生

身長170センチ
体重65キロ

銀髪

特に冴えた所もなく

ごく普通の高校生

髪型は目にかかる程度の長さ

ラノベが好き

友達4

アンドウハルカ
安藤春香

女 高校一年生

身長153センチ

体重38キロ

黒髪

おとなしくいつも本を読んでいる

あまり喋らない

髪型はロングのツインテール

読書好き

第0話 ―人物紹介―（後書き）

始めての小説

まずは人物設定・・・

ここでつまりかけた・・・

第1話 ―悪夢のハジマリー(前書き)

初めての小説です 優しい目で見てね！
この話から本編です

体育の途中だったのだろう。
体操服をきた生徒たちがどんどん捕まえられ食らわれていく。
それで食らわれた生徒は倒れ、動かなくなった。

その時

動かなくなった生徒が動き出したのだ。
生きていたのかと思っていたが、
よく見るとさつきとは違う様子で動いていた。
その人の形をした何かみたいなき動きだった。

「何なんだ、あいつらは！」

涼斗はそれを見てそう言った。
そして武器になるものを探しに教室に戻り
教室の掃除道具箱でモップを手に入れ教室から出た。

オオオオオオオオオ

廊下に出て早速一人の人の形をした何かに出くわした。
しかし見えていないのだろうか。
こちらには全然気づかずに通り過ぎていく。
その女生徒の体には食われてしまったのであろう
いくつもの穴があき、そこから内臓が飛び出していた。

「……きもっ！」

そう言った途端、その女生徒がこっちを振り向き、ゆっくりと向かってきた。

「本当に何なんだ！その傷じゃもう生きていられないはずなのに！」

はたから見ても生きてはられないであろう傷を負っている
その女生徒は涼斗に向かつて襲い掛かってきた。

涼斗はモップで女生徒を止めようとするが
女生徒の力が強く床に倒されてしまった。

「くそ・・・何でこんなに力が強いんだ！」

ギリギリの間で涼斗はもがいていたが
押さえつけられ食われそうになる。

もう駄目か・・・

そう思つて目をつぶつた時

グシャ！

何かが碎ける音がして
女生徒が涼斗に倒れてきた。

「大丈夫？涼斗」

そこにはいつも一緒にいた叶がバットを持って立っていた

「叶・・・？生きていたのか」

叶は涼斗の上に乗っていた女生徒をどけると
床に座り込み喋りだした。

「何を言っているのよ、涼斗、私が死ぬはずないでしょ？」

涼斗も回りに何もいない事を確認して座りなおした。

「そうだよな、叶が死ぬはずねえよな」

涼斗はそう言って笑い出し、叶も一緒に笑い出した。
そうしてひとしきり喋りながら休んだ後。

「私、春香ちゃんを探しに行きたいんだけどいいかしら？」

「構わない、俺も行くつもりだったんだ」

と、叶が言い出し涼斗も賛成した

そして二人は春香がいるであろう図書室へ向かった。

その時はまだ俺達は実感していなかったのであろう
普通の日常などない場所に来たと言う事を

第1話 ―悪夢のハジマリー― (後書き)

なんか変な感じだな。。。

第2話 | 迫る時間 | ルートA (前書き)

この話から分岐ありますW

第2話 ー迫る時間ー ルートA

合流した二人は春香を見つけるために四階の図書室を目指す。
二人がいた場所は二階だったので階段を使い行こうとした。

その道中。

「ねえ、あいつらの事何て呼ぶの？」

そう叶は言い出した。

それを聞いた涼斗は悩んだすえこう言った。

「そうだな・・・【奴ら】はどつだ？」

「え？何で？」

そう返した叶に、

涼斗はこう言った。

「ゾンビでもいいんだが、映画やゲームじゃないからな」

「そっか、わかったわ【奴ら】ね」

人の形をした何かを【奴ら】と呼ぶ事に決め
先を急ごうとした時。

誰か助けしてくれえ！！！！

三階にある教室から悲鳴が聞こえてきた。

もうぎりぎりなのであるう。

声が切羽詰っていた。

それを聞いた涼斗は叶に話し掛けた。

「まだ生きてる奴だ！俺は助けたい！」

「春香ちゃんの事はいいの？助けるんでしょう？」

「わかってる、わかってるけど・・・」

涼斗は春香の事も心配だったが

聞こえた悲鳴のせいで階段を上ろうとしない。

「どうするの？助けに行くの？」

涼斗は叶にそう言われ

「ごめん、俺行つて来る！」

涼斗はそう言つて悲鳴が聞こえた方へ走り出した。

「仕方ないわね・・・まあ涼斗らしいけど」

叶はそう言い、涼斗が向かった方へ走り出した。

間に合うか

涼斗は全速力で悲鳴が聞こえる教室までたどり着いた。

「大丈夫か！？」

涼斗はそう言いながらドアを開けた。

「ぎゃああああああ!!!!」

ドアを開けた涼斗の目に映ったものは

【奴ら】に無残に食らわれていく男子生徒の姿だった。

「助けて！痛いっ！痛いいいいいい!!!!」

「くそ間に合わなかった！」

それでも涼斗は教室の中へ入り

【奴ら】に向けてモップを振り下ろした

グシャ！

頭が碎ける音と共に

【奴ら】の体が床に倒れ

男子生徒は荒く息をしながら床に倒れこんだ。

「かはっ……はあはあ……」

「くっ……助けてやれなくてすまない……」

食われた人間は【奴ら】とかす。

普通ならここで終らせてやるべきなのだろう。

しかし涼斗はモップを振り下ろす事ができなかった。

噛まれた男子生徒は血を吐きながらも涼斗に頼みだした。

「は……早く殺して……【奴ら】にはなりたくない……」

「で……でも……俺は……」

「早く……！もう……目が……」

それでも涼斗は何もできず

そのまま立っていた。

そして男子生徒は致死量であろう

血を吐き出し動かなくなった。

「くそ……くそ！」

男子生徒がびくびくと痙攣しだし

【奴ら】となって動き出した。

涼斗はそれを見てやっとここが地獄だと実感した。

【奴ら】となった男子生徒が涼斗を食らおうと立ち上がり歩き出してきた。

「アア……アアアアアア」

【奴ら】とかした人間はもう助からない

涼斗は覚悟を決め

モップをその男子生徒の頭に振り下ろした。

グシャ！

目の前で【奴ら】と化した生徒を涼斗は殺した。

それからだったのだろう、涼斗が

【奴ら】と化した人間を殺すのをためらわなくなったのは。

「涼斗……？」

いつのまにか教室の入り口に立っていた葉が
涼斗の傍に行きながら聞いた。

「涼斗……大丈夫なの？」

「大丈夫だ……もう決めた」

涼斗の言葉を疑問に思った葉は。

「何を決めたの？」

それを聞いた涼斗は

「もう迷わない、【奴ら】はもう人間じゃないんだ」

そう答え教室を出ようとした、その時

来ないで！来ないでええええ！！！！

上の階からだろうか悲鳴が聞こえた。

涼斗と叶にはこの悲鳴の主に心当たりがあった。

「この声は！」

「春香の声だ！急ぐぞ叶！」

「うん！」

二人は教室を出て走り出し、
図書室がある四階へ向かった。

第2話 ー迫る時間ー ルートA（後書き）

初めてこんな書いた・・・

感想などお待ちしております！

第3話 「友達」を殺した日―（前書き）

この分岐は早速メインキャラの一人が死ぬルートになっております

第3話 ― “友達” を殺した日 ―

上の階から聞こえた悲鳴を便りに
涼斗と叶は図書室を目指す。

嫌！嫌ああああ！！！！！！

先ほどから春香の悲鳴はずっと聞こえてきている
涼斗と叶は走るスピードを上げて、図書室に急いだ。
そして二人は図書室のある四階にたどりつき
図書室の入口を見ると、春香の悲鳴に釣られてきたのであろう
【奴ら】が何匹も群がっていた。そして二人の足音に気づいたのか
近くにいた何匹かの【奴ら】が二人の方を振り向き出した。
涼斗は【奴ら】に向けて走り出し、叶もそれに続いた。

「邪魔だ！そこをどけえ！」

「邪魔よ！そこをどいて！」

涼斗と叶の二人は武器を【奴ら】の頭に
振り下ろし、排除しながら入口にたどりついた。
そして叶はそこで立ち止まり。

「ここは私が食い止めるから、春香ちゃんを！」

「わかった、死ぬなよ！叶！」

涼斗はそう言い、図書室の中に入ったが
さっきまで聞こえていた、春香の悲鳴が止んでいた。

それでも涼斗は春香の姿を探し始めた。

「どこにいるんだ！春香！」

涼斗はそう言いながら、図書室の奥に向かった

図書室の奥には何匹かの【奴ら】が群がっていた。

そこに近づいた涼斗は【奴ら】が群がっている場所を見た。

そこには【奴ら】に食らわれている春香の姿が

涼斗はそれを見て立ち尽くしてしまった

その間にも春香は【奴ら】に食られていった

首筋に噛み付かれ、腕を食われ、足を挟られて行く。

誰が見ても助からないであろう致命傷。

「春香……」

間に合わなかった

頭ではそう思いながらも

涼斗はモップを手に春香を食らっている

【奴ら】に向けて振り下ろした。

それがもう無意味な事だとわかっていても

春香を助けてやれないとわかっていても

そうせずにはいられなかった。

春香が食らわれて行く所をもう見たくなくなったのだ。

そして【奴ら】を片付けると

涼斗は春香を食らっていた【奴ら】をどかし

血塗れで床に倒れている春香の死体を見つめた。

「ごめんな・・・助けてやれなくて・・・」

【奴ら】に食われた人間は【奴ら】になって蘇る。それがわかっていても、涼斗は春香を殺す事はできなかった。そうして何分かそこで立ち尽くしているとさっきまで”春香”だったモノがゆっくりと動き出し立ち上がると、涼斗に向けて歩き出し始めた。

「アアアアアア・・・アアアアア」

涼斗はただ立ち尽くすだけで武器を振るおうともしない。その間にも”春香”は涼斗に近づいていく

「涼斗！」

入り口の方から叶の声が聞こえた。

「仕方ないのよ！間に合わなかったんだから！」

叶はそう叫び涼斗に向かって走り出した。涼斗はそれを聞いてモップを握りなおすとモップを高く振り上げ

「ごめんな・・・春香・・・」

そう言った後

”春香”の頭に向けて振り下ろした

グシャ！

頭蓋骨が砕ける音と共に首が押し折れ
さつきまで”春香”だったモノは床に倒れこんだ。
それでも涼斗は【奴ら】となってしまうた
”春香”に向けて・・・

何度も、何度も、何度も・・・

モップを振り下ろし続けた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「もう死んでるわ！落ち着いて涼斗！」

叶がそう言っているにも関わらず

涼斗はモップを振り下ろし続けた、そして

”春香”だったモノは首がとれ、腕が千切れ、足が押し折れて行く。

「涼斗！」

叶は涼斗を抱きしめ、腕を動かさないようにした。

それでも涼斗はモップを振り落とし続けようとする。

「もういいの・・・！」

叶が言ったその一言で

涼斗の体から力が抜け床に座り込んだ。

そして叶は涼斗を抱きしめながら言った。

「涼斗は悪くないよ・・・？」

それを聞いた涼斗はさっきまで” 春香” だったモノを見つめながらこう呟いた。

「俺が人を助けようなんていったからだから間に合わなかった

春香が死んだのは俺のせいだ

俺のせいで春香は【奴ら】に食われてしまった……」

「涼斗のせいじゃないよ！

誰だって助けたいって思うじゃない！

だから……だから涼斗は悪くないよ……」

叶はそう言い涼斗を抱きしめる力を強めた

涼斗は叶の腕を掴むとわずかに震えだした。

「助けられなかった……」

涼斗はそう言うつと泣き出してしまった。

叶は泣いている涼斗の頭を撫でながら、涼斗にこう言った。

「私は死なないよ……？」

ずっと涼斗の傍にいるから……」

そうして涼斗が落ち着くまで

叶は涼斗を抱きしめていた。

泣き止んだ後、涼斗はこう言い出した。

「もう……誰も失わせはしない……！」

そして立ち上がると、春香に近づいて
春香がつけていた髪を結ぶゴムをとった。

「春香、ごめんな・・・そしてさよなら・・・」

涼斗は春香に向けてそう言つと

図書室の出口に向かって歩き出した。

「ごめんね、春香ちゃん・・・バイバイ・・・」

叶も春香に向けてそう言い

春香が好きだった本を側において

涼斗が向かった方向へ走り出した。

そしてその後、図書室には春香の死体が

春香が好きだった本と共に残っていた・・・

その時からだろう、二人が

本当の地獄というものを知ったのは・・・

第3話 「友達」を殺した日―（後書き）

台詞が多くなっ たかな・・・？

感想などお待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8087s/>

学園黙示録 HIGH SCHOOL OF THE DEAD ~とある学校の場合~

2011年10月9日01時06分発行